

学・会・近・況 全体シンポジウム

大地からみる南アジア世界

—環境へのアプローチを考える—

岡橋秀典

21世紀初頭の今日、環境問題への対応や環境との共生は、世界的な重要課題となっている。特に、中国やインドなど急成長する新興国では、環境破壊や環境汚染など環境に関わる様々な問題が噴出しており、この方面の研究の緊急性が認められる。環境にどうアプローチするかは、今日の諸学につきつけられた大きな課題であるといえよう。

このような問題意識から、今回の共通論題では、南アジアの環境研究をテーマとして取り上げた。自然・人文両面から学問分野を超えた議論を行い、地域研究からのアプローチに新たな方向性を見出そうとした。

環境研究はこれまで、地球環境問題、地球温暖化問題等々、自然科学からのアプローチが一般的であった。しかし、環境はきわめて複雑かつ広範な内容をもつ。オギュスタン・ベルクが『風土としての地球』(1994年)で述べているように、地球環境問題において「問われているのはまさに、我々の社会の、空間および自然に対する関係のおもむきなのである」。それゆえ、人文社会科学からの考察が不可欠であるといえよう。

また、環境について研究する時には、それらが所在する地域のコンテキストも十分にふまえなければならない。この点で、特定の地域を対象として、自然、歴史、政治、経済、社会、文化など多様な側面、多くの学問分野からのアプローチが可能で、しかもそれらの総合化を課題としている地域研究には特に期待されるところが大きいのではなからうか。

しかし、南アジアの環境問題研究の現状を検討すると、未だ十分な進展がみられないように思われる。国立情報学研究所のCiNii (NII論文情報ナビゲータ)を用いて論文検索を行ってみた(2014年8月4日検索)。タイトルに「環境問題」と国名の双方をもつ論文を検索してみた。南アジアの場合、論文数の多い順に、インド23件、バングラデシュ8件、ネパール5件、パキスタン、スリランカ各1件であった。これに対して、中

国の場合は482件、東南アジア諸国ではタイが49件、インドネシア21件、ベトナム20件、マレーシアおよびフィリピン16件といった状況である。あくまでも、ごくわずかなキーワードによって検索された量的データに過ぎないが、インドと中国、さらに南アジアと東南アジアの間に、環境問題研究の進捗状況の差を推測することは間違っていないように思われる。

しかしながら、南アジアについても環境研究に関わるまとまった成果が出てきていることには注目を要する。柳澤悠編(2002)『現代南アジア4 開発と環境』であり、ここでは、農業・家畜・森林と環境変動、都市環境と住民、人口・環境・疾病、持続可能な発展と環境、を軸に考察を行い、特に環境変動と開発の関連をみるには長期の歴史的分析を要することを強調している。しかしながら、ここでも、自然環境そのもの、環境思想、現代の環境問題などについては十分な検討が行われていない。

上述のような趣旨により、本シンポジウムでは、全体として、自然と人文、現在と過去をカバーできることを念頭におき、次のような報告で構成することにした。

- 1 松本淳(首都大学東京)、浅田晴久(奈良女子大学)
南アジアの気候と農業
- 2 宮本真二(岡山理科大学)
南アジア地域(ブラマプトラ川流域)の民族移動と土地開発
- 3 山下博司(東北大学)
インドの環境思想と現代
—その可能性と限界とをめぐって—
- 4 水野祥子(九州産業大学)
イギリス帝国における森林の管理と利用
—帝国内学会議(1920~1947)を通して—
- 5 三宅博之(北九州市立大学)
現代都市と環境問題

南アジアの環境を考える時、まず看過できないのは気候であろう。明瞭な乾期と雨期からなるこの地域の二季的な気候は人間社会に様々な影響を与えている。松本淳、浅田晴久両氏による報告「南アジアの気候

と農業」は、この点を稲作農業に焦点を当てて論じた。夏に雨が多いアジアのモンスーン気候は、高い温度環境を必要とする稲作農業に適しているとされ、中でもインドでは、降雨が多いほど穀物生産量が増えるとされてきたが、ガンジス・ブラマプトラ流域で降雨と稲作生産量との関係を地域的に検討した結果、両者の関係には大河川の上流と下流域、国による明白な違いが見られ、近年の気候変動に対する対応にも地域的な差異が存在することが判明した。最下流部のバングラデシュでは、1998年の大洪水以降、年間でもっとも生産が多い作季は乾季作へと変化しており、灌漑面積の増大によって、降水量変動による直接的影響は小さくなってきている。稲作収量と降雨との関係は時代により変化すること、また気候と農業との関係では地域特性への配慮が重要なことを指摘した。

続く宮本真二氏による「南アジア地域（ブラマプトラ川流域）の民族移動と土地開発」は、長期の歴史的な土地開発の過程を地形環境の側面から検討した。直接的な物的証拠である考古学的研究の進展が望めない状況をふまえ、ヒマラヤ高地では埋没腐植土層（埋没土壌）、ブラマプトラ川流域の低地・ベンガル・デルタでは、沖積平野の地形環境変遷などの間接的な証拠にもとづき、当該地域の土地開発史を考察した。その結果、ヒマラヤ高地では、約3000年前以降初期的な開発があり、1000年前以降に民族移動によって本格的な開発がなされたこと、ベンガル低地では、約12000～11000年前頃に自然堤防状の微高地の堆積層を利用する形で土地開発が行われ、同デルタ中央部では水田と屋敷地は約1300年前までに形成され、土地開発が進展したことを推定した。

前二者の報告が自然科学的な手法により、自然環境の側面から人間生活を考察したのに対し、山下博司氏の「インドの環境思想と現代—その可能性と限界とをめぐって—」は、人文科学、なかでも思想や哲学から「南アジア世界の自然/環境への意識」に接近した。古典文献研究を基礎とするアプローチについては、これまでの成果を確認するとともに限界も指摘し、サンスクリット偏重から地域性をより反映した文献へという方向性と、古代偏重から、より後代の文献へというシフト（民話との接続）を、打開策として提案した。また、もう一つのアプローチである現実の環境問題と向き合う実践については、環境問題に直面する途上国での実践事例にもとづいて検討を行い、古典的環境思想の単体での無力さとともに、「文献から現実へ」ではなく、現場の現実に立脚して、行

動するための思想・原理として何が必要・有用かという意識・発想の切り替えが必要なことを問題提起した。

現代インドでは植民地時代の森林管理が少なからぬ影響を与えている。イギリス帝国内では19世紀後半から政府による森林管理制度が確立していったが、それは環境をどのように捉え形成されていったのか。水野祥子氏の「イギリス帝国の森林政策とインドの経験—帝国林学会議(1920～1947)を通して—」は、帝国全体の林学・森林政策の指針を協議する場として開催された帝国林学会議に焦点を当て、インドをはじめ熱帯植民地の慣習的な土地利用がどのように論じられたのかを検証した。まず、1920年代までに焼畑移動耕作を利用した造林法「タウンヤ」の導入や、村落共同体が管理する森林の設置の試みが始まったことを指摘し、これら各地の生態系や現地社会との接触によって生み出された方法が帝国林学会議という場で交換され、共有される中で、現地の慣習的な土地利用を取り込んだ新たな森林管理が帝国に展開したことを明らかにした。他方で、1930年代後半に土壌浸食や現地住民の人口急増への危機感が高まるにつれて、植民地科学者の中には定住化への転換など現地住民の土地利用に直接的な介入を求める動きが新たに出てきたことにも言及した。従来の、ヨーロッパからその植民地への一方通行的な林学・森林政策の普及という見方を問い直し、帝国林学の形成にみられるダイナミクスを提示した点が貴重である。

近年注目される経済発展の裏側で、インドでは人々の健康を脅かす環境問題の深刻化がみられる。三宅博之氏の「現代都市と環境問題」は、インドの環境政策・法令を概観した後、これまで研究の少ない都市に焦点を当て、大気汚染、上水供給、水質汚濁の現状と課題を報告した。経済成長・貧困と環境をどのように調和させるかという困難な課題の下で、科学技術の進歩による汚染処理・防止技術の改善、環境裁判所による迅速な判決や被害者側(原告)にたった判決がみられることを紹介し、先進国並みになってきた環境教育にも将来への期待を示した。

以上のように、これまで南アジア地域研究においてあまり交流のなかった自然科学からの登壇を得、また人文科学についても多様な観点から報告がなされた結果、環境研究あるいは環境問題研究のもつ広がりやその可能性を示すことができたように思う。また、各報告でも興味深い貴重な成果が示され、出席者の知的好奇心を刺激することにつながっ

た。特に、これまで縁の薄かった自然系の報告について率直な質疑が行われたことを評価したい。ただ、時間的制約もあって5つの報告に限られたため、この方面の研究の全体像を捉えるには無理があった。それゆえ、地域研究からのアプローチに新たな方向性を見出すまでには至らなかったが、今後、もう少し絞り込んだテーマの下で学際的議論を重ねることにより、このような課題に接近することができると考えられる。本シンポジウムが一つの端緒となって、南アジア地域研究において空間や自然についての認識が深められ、併せて地域社会のそれらへの関係も研究対象となり、新たな研究の地平が切り開かれることを祈りたい。

おかはし ひでのり ●広島大学文学研究科教授